

人格機能における不安体験の意味

森 田 慎

Meaning of the Experiencing of Anxiety in Personality Functioning

MORITA Shin

は じ め に

不安は精神病理学や人格心理学、実験心理学など、幅広い分野での研究テーマである。不安は、精神療法の実践の中でクライアントを理解するために極めて重要な位置を占めるが、実験による実証的な研究も数多く行われている。本研究では、主に臨床心理学的、人格心理学的な視点から、不安の理論と実証的な研究を概観し、不安と自我の健全さについて考察する。

I 不安の理論 —— 心理力動論を中心に

Freud, S (1917) 以前から、不安は哲学の分野で、本格的に取り上げられてきた。

Kierkegaard (1844) は、不安を原初的不安と可能性の選択に伴う不安を分け、特に後者の不安について考察をすすめている。後者の不安は、自分の選択の可能性を理解し、その結果として生じるであろう責任を認識した上で、自分にゆだねられている自由に直面することから生じるのである。個人が自分の自我を獲得できるかどうかは、自分の可能性に固有の不安に直面し、それでも前進する意志と能力にかかっている。不安への直面なくしては、自由でも責任的でもありえない。もし人が不安を避けるならその人は自分自身であることも避けているのであり、自分の可能性を認識し選択することを拒否したことになる。つまり、不安は自由に直面した時に起こり、無限の可能性と創造性がそこにある。不安から逃げることは自分の可能性を実現することの拒否につながり、不安は自己の発展に極めて重要なものとされる。Kierkegaard の思想はキリスト教信仰に結び付いた哲学的な立場のものであるが、その考えは May (1950) などにも大きな影響を与えている。

一方、Freud, S (1917) は、不安を神経症の中核にあるものとして、臨床経験をもとに不安の分類や理論化を大胆に進めた。Freud は不安を、合理的に了解できる現実不安と、対象が不明確であったり了解のしづらい神経症的不安に分類した。Freud, S は初め、神経症性不安は、禁欲などにより自我の制御の及ばない未使用のリビドーが増加することによって生じると考えたが、後に (Freud, S. 1926) は不安には、危険を予期し、自我をして危険への対処に向かわせるための信号機能の存在も認めている。Freud, S は出産時の外傷体験をモデルにしつつ、自我が処理仕切れ

ない興奮や緊張が実際に高まることから生じる不安と、そうした危機的状況を避ける作業を自我に促す不安、つまり信号不安を分けて考えている。内的な衝動に自我が圧倒され制御が困難になっているのが神経症性の不安である。その不安が加工されずにそのまま出ているのが不安神経症であり (Freud, S. 1895), 一方, 危機的状況が迫っていることを自我が予知し, 信号不安が生じることで, 自我による防衛機制が働き, 不安が加工され症状を形成しているのがヒステリーや強迫神経症であるとされる。Freud, S. は, 不安が意識体験とならない強迫神経症患者に強迫的な行動をやめさせると本人が耐えられないほどの不安が生じることを観察し, 症状形成は不安を意識化し葛藤に直面することを避けるために生じたものであると考え, 神経症の症状の中核には不安があるとした。ここから, 不安を避けるための自我の防衛機制という考えが展開することになる。

一方, Freud, S. による防衛機制という概念を発展させ, さまざまな防衛機制のあり方を研究したのは Freud, A. である。Freud, A. (1936) は, 抑圧, 退行, 投射, 反動形成, 置き換え, 合理化, 知性化, 隔離, 取り消し, 取り入れ, の 10 種類の防衛機制を挙げた。防衛機制とは, 不安を避けて安定化を図り, 自我を守るための方法であるが, 不安を避けようとしても, 問題は根本的には解決していないので, 防衛機制によって不安が解消されることはなく, 一層の防衛が必要になることもある。

精神分析において防衛機制の概念は, 専ら臨床的な観点からのものであったが, 後に, 防衛機制そのものが, 経験的に実証可能な概念として, 知覚や認知による実験や研究の対象になっている。

一方, 笠原 (1983) は, 防衛機制とは異なった観点から, 神経症性不安の解消方向について論じている。それによれば, 神経症性不安の解消方向としては, 主観的体験化, 身体化, 社会行動化の 3 つがある。主観的体験化とは神経症性不安のもっとも正当な解消方向であるとされ, 不安は心の中で体験として加工され, 身体領域や行動上の障害はほとんど出ない。強迫神経症や離人神経症などが, これにあたるとされる。身体化とは不安を身体領域に解放し, 身体症状を形成する場合である。これには, 大きく分けて, 身体の外面にでるヒステリーと身体の内側の臓器に向かう心身症の 2 つのタイプがあり, 不安は主観的な症状としては体験されにくい。また社会行動化は, 家出, 登校拒否など, 行動化によって不安を発散する場合で, この場合も, 不安は主観的体験とはなりにくい。笠原 (1983) は, 不安の解消方向として, これらの 3 つを軸として定めれば, すべての神経症性不安の位置と行方を定められると述べ, 不安の処理について, 体験化が他の 2 つより高度であり, 自我の力が強ければ, より高度の処理が可能であると考えている。

Freud は神経症から正常な現実不安を中心に論じたが, Sullivan (1953) は分裂病をはじめとした精神病理を対人関係から生じる安全保障の維持という観点から理解した。Sullivan は, 人間の行動の根源的動因として, 空腹, 性など生物学的な満足の欲求と, 心理社会的な安全保障感の獲得, 維持の 2 つを基本に考えた。そして, 人間は幼少期から, 安全保障感を獲得するために, 母親を初めとする重要な他者から承認されないような心理的傾向は排除され, 意識から除かれてしまう。そして, 生物学的な欲求も, 他者に承認される内容でしか意識化さない。こうした隠れた心理的傾向は, それが意識化されそうになると安全保障感が脅かされるため, 自我が受け止められるような不安体験そのものが生じがたい。このような心的機制を Sullivan は解離と呼んだが,

解離された心理的傾向はすべて意識の外で働くことになる。そして、Sullivan は解離された心的傾向の数、量が大きいほどその人が将来精神障害になる傾向が大きくなると考えている。つまり、不安は個人の意識内容や体験の意識化、行動のパターンなどを大きく規制しているのである。

Freud と Sullivan の不安の研究は、主に精神病理の症例理解から進められたが、その中で不安の肯定的な意味も考察されている。一方、不安を病理からではなく、正常な不安のもつ肯定的な意味合いを、より積極的に考察したものとして May (1950) の研究を挙げる。

May (1950) は“不安とは個人が1個のパーソナリティーとして存在するうえに本質的なものと解するある価値が脅かされた時に生じる気掛かりである”と述べている。そして恐怖と不安の関係について、自己の存在や価値を脅かす根本的な体験が不安であり、後に個体が成長して特定の対象を区別できるようになって初めて恐怖が生じると考えており、不安を恐怖より根源的なものと考えている。不安処理の方法として、神経症の症状は、脅威となる問題を未解決のままでは不安を軽減することで葛藤状況を処理しようとする消極的方法であるとし、自我の発展可能性と自己の共同社会との相互関係を犠牲にするものと考えている。一方、人間は正常な発達過程の中で、しばしば不安に遭遇し、それに直面し、不安を認知しつつ乗り越えることが建設的態度と見なされる。逆に神経症の人はそうした状況で、脅威を強く感じてしまい、不安に立ち向かうことができない。正常な不安においては、人は建設的な方向を志向するのであり、前進することで、一層大きなものが達成されてゆく。つまり、自我の積極的側面は不安に直面し乗り越えることで発達するとされている。

II 不安の実証的研究

それでは、以下に、不安に関する実証的な研究を見てみよう。

(1) Repression-Sensitization 次元の研究

不安から自我の安定を守るための対処法は、精神分析理論で防衛機制と呼ばれ、研究がなされてきた。しかし、防衛機制については人格心理学、生理心理学を含めた実験心理学の分野でも沢山の研究がなされ、様々な防衛機制を包括する防衛次元として概念化されたのが Repression-Sensitization Dimension (以下、R-S 次元と記す) である。精神分析において防衛機制の研究は専ら、臨床的な観点からのものであり、治療法や症状の理解が中心であったが、その後、知覚や認知による実験で防衛機制を検証しようとした研究が行われるようになった。

Bruner & Postman (1947) は脅威に対する個人の反応に2つのパターンが見られることを示した。一方は、認知閾が連想反応時間の増加とともに単調に増加するという反応を示した。すなわち、不安が高くなればなるほど知覚防衛も大きくなるのに対し、もう一方は、不安を最も多く引き起こしやすいと思われる言葉に対し、認知時間がより早くなるという反応を示した。さらに、Postman, Bruner & McGinnies, E. (1948) は価値体系との関係で、認知閾について吟味し、知覚的増感、知覚的警戒、知覚防衛を区別した。このような実証的な研究を初めとして、防衛における個人差の研究が盛んに行われるようになり、脅威刺激に対する反応に関して、接近—回避 (approach-avoidance) の次元が存在することが明らかにされてきた。それらの研究によると、

R-S 次元で Repression の極にあるもの (Repressor) は、不安覚醒刺激と、それによってもたらされる結果の回避 (avoidance) を含む反応が見られ、抑圧、否認、合理化といった防衛機制が見られる。例えば、寄せ集め文章テストでは、失敗したものよりも、成功したものを記憶している (Eriksen 1952)。文章完成テストでは性欲や敵意の反応を差し控えたり (Lazarus, et al. 1951)、ありきたりのあたりさわりの無い言葉を並べたり、答えを拒否したりする (Carpenter, et al. 1956)。他方、Sensitization の極にあるもの (Sensitizer) では不安刺激に接近したり統制することで不安を低減しようとする行動が見られ、知性化、反復強迫などの防衛機制が見られるとされる。苦痛と結び付いた連想や失敗の想起が容易であり (Lazarus & Longo 1953)、言語連想テストでは攻撃や不安を含む刺激語に敏感に反応する (Eriksen & Lazarus 1952) といった結果が得られている。

R-S 次元の測定法については、Altrocchi, Parsons & Dickoff (1960) が MMPI の 6 尺度を組み合わせた尺度の作成を試み、Sensitization の尺度として、D (抑鬱)、Pt (精神衰弱)、Welch Anxiety Index の 3 尺度を、Repressor の尺度として、L (虚構)、K (修正)、Hy (ヒステリー) 否定の 3 尺度を用い、R-S の次元は、前者から後者を引いた総得点により決定されるようにした。Byrne (1961) はこの尺度から重複をさけるようにして、R-S 尺度を作成し、さらに内的整合性を吟味し、修正 R-S 尺度を作成した。

Byrne (1961) が、MMPI の項目から R-S スケールとして質問紙を作成して以来、これを用いて様々な研究がなされ、それらの研究によれば、Rr は Sr に比べ不安を言語化しにくく、理想の自己と現実の自己のズレはより小さいという結果を得ている。一方、生理的な指標や言語連想については、Rr は Sr に比べ、動揺を示しやすいということを示す研究結果がある (Lazarus & Alfert, 1964, Lomot, 1965, Hare, 1966)。これらをまとめると、Rr は質問紙レベルでの不安は低いが、その反面、生理的次元では、Sr よりも影響を受けやすいことになる。投影法を用いた研究では、TAT において、Sr が Rr より多くの情緒的言語を用いる傾向があり (Ullmann, 1958)、脅威、事故、心的外傷などのテーマを選択しやすく (Phares, 1961)、反応時間、物語りの長さがともに長く、豊かな物語を作る (木村, 1983) という結果が見られている。

もともと R-S 次元の不安は、その理論的背景からしても神経症性不安に関連が深い不安だと思われる。Bell & Byrne (1978) によれば、R-S 尺度の得点は、MAS と正の相関を示している。また、Golin, Herron, Lakota & Reineck (1967) は、R-S 尺度と MAS が同義であることを示している。

以上の先行研究の内容を概観すると、Sr は神経症性不安を意識化しやすく、主観的な自己像が低い反面、生理的な指標では、不安刺激の影響を受けにくく、Rr は意識化される不安は低いが、生理的な指標からは不安刺激に影響されやすいといえる。これを先の笠原 (1983) の研究とあわせて考えれば、Sr は不安の主観体験化傾向、Rr は不安の身体化傾向があるとも考えられる。

(2) 成長不安と抑制不安

一方、不安には、精神病理と関連づけて研究されてきただけでなく、それを乗り越えてゆくことで、人格の成長につながるような健康な不安もあると考えられる。山本 (1992) は、人間的成長に肯定的意味を持つと考えられる不安と否定的な意味を持つと考えられる不安を、それぞれ成

長不安、抑制不安と名付け、2つの不安を測定するための質問紙を作成している。質問紙の項目選択では、“成長不安”は、青年の人間的成長や自己実現に促進的な働きを持つという視点を基本にして、実存的な不安、人間的成長につながる青年の理想志向に起因したり、Maslow (1962) の成長動機に関連した自己実現への衝動に起因する不満足感・不安感、達成動機に関する不安 (Alpert & Norman (1960) の促進不安)、適切な対処行動への動因としての不安などの観点から項目が選ばれている。一方、“抑制不安”は、青年の人間的成長や自己実現に抑制的、阻害的な結果をもたらすという点を基本に据え、関連する不安検査項目などを参考に、青年の人間的成長を阻害する弱気・不安や精神病的な恐怖感・妄想・自己崩壊感、などの観点から項目が選ばれた。完成された質問紙は成長不安と抑制不安の独立した2因子からなるものである。山本 (1992) は、この質問紙について実存心理検査、自我同一性次元尺度、自己概念尺度から内容的妥当性について検討を行い、成長不安については実存心理検査、自我同一性次元尺度において、抑制不安は、3つのすべての尺度について、有意な関連があることを見いだしている。

(3) 状態不安と特性不安

もう1つの実証的研究として、状態不安と特性不安について述べる。

Cattell & Scheier (1961) は人格の研究において、過去の研究者が、気分状態を除外し、不安特性の定義と測定に関心を向けていたことを指摘し、気分状態と特性の両方を考慮する必要性を主張した。因子分析の結果、2つの不安因子が取り出され、特性不安 (trait anxiety)、状態不安 (state anxiety) と命名された (Cattell, 1966)。また、Spielberger (1970) は MAS を用いた研究での結果の不一致や混乱の多くは、人格特性としての不安とストレスへの反応としての不安状態があいまいに用いられているためだとし、各々を特性不安と状態不安として明確に分け、その測定法を示した。

状態不安は、実験室での電気ショックのような外的刺激が脅威として認知される時に生じる一時的な不安の過程である。刺激が認知的に脅威として評定されれば、状態不安が喚起され、状態不安が感覚的、認知的フィードバック機構を通じて、危険事態を回避したり、直接処理するための信号として働く。そして、不安過程は、根底が状態不安であり、個人的に脅威となるストレス事態への認知的評定、そこから生じる強い不安を緩和するために働く心理的防衛、状態不安によって動機づけられた行動を含むとされる (Spielberger, 1975)。一方、特性不安とは人格特性としての不安であり、個人における不安の比較的安定した個体差を意味し、過去の経験を反映したもので、不安傾向の個人差を決定するものと考えられている。すなわち、特性不安は脅威として認知された事態に対し、状態不安の高まりを伴って反応する傾向の個体差であるとされている。

状態不安と特性不安の関係については、電気ショックのような明らかな物理的ストレス条件は特性不安の高低に関係なく殆どの被験者は高い水準の状態不安で反応するため、特性不安の高さが状態不安に及ぼす影響は小さくなるが、与えられるストレスが心理的なものの場合、特性不安の高低が状態不安に影響を及ぼすことを示した実証研究が多いとされる (古賀, 1980)。

以上のように、R-S 次元の不安、成長・抑制不安、状態不安と特性不安の3つの研究について紹介したが、これらの尺度には、どのような関連があるのだろうか。R-S 尺度、成長・抑制不

安はともに人格特性としての特性不安である。状態不安・特性不安を R-S 次元に関連させて考えれば、脅威的な事態に対して、状態不安が自我防衛を作動させる信号不安としての役割を果たすのに対し、R-S 次元の特性不安は不安への“接近—回避”という自我防衛の型に関連した不安である。

一方、R-S 次元の不安と成長・抑制不安について考えると、抑制不安とされるのは、臨床群の主観的な体験などに基づいて作成されているのであるから、抑制不安は神経症性の不安に密接に関連するものであり、R-S 尺度で測られる不安に関係が深いことが想定される。また、成長不安がどのような性質を持つのかは、特に、意識的レベルと異なった面については、ほとんど研究されていない。筆者の成長・抑制不安と TAT 反応の関連についての研究（森田，1994）によれば、抑制不安については、TAT の反応の文節数、反応内容などから、予測通り R-S 次元と同様の結果が見いだされた。一方、成長不安については、TAT 反応そのものから、独自の傾向を検出することはできなかったが、抑制不安との交互作用が見られ、成長不安の高い場合は、抑制不安の持つ R-S 次元に類似した側面を一層強調するように概ね作用しているという結果が見られた。しかし、成長不安のもともとの意味を考えれば、成長不安が、本当の意味で、人間の成長に関連した健康な不安であるかどうかが十分に検証される必要があると思われる。この点、成長不安は他の質問紙でその妥当性が確かめられてきたが、質問紙での自己評価と客観的な評価は、必ずしも一致しないことが研究されており（斎藤，1962，1969）、質問紙以外のもっと客観的な方法でも吟味される必要があるように思われる。

Ⅲ 不安の認知と自我の健全さ

では、質問紙で測定される主観的な不安の高さは、自我の健全さとどのような関係を持つのであろうか。ここでは、自我機能の客観的な情報を提供すると考えられるロールシャッハ・テストと対比させながら考察をすすめることにする。

（1）主観的人格評価と客観的人格評価

我々が心理テストでアセスメントを行う場合、クライアントの主観的な自己評価と客観的な評価にはしばしば隔たりが見られる。すなわち、クライアントの現実吟味能力が損なわれている場合、主観的評価は客観的な評価との間にズレが生じることになる。この点を、Klopper (1956) は X 軸、Y 軸にそれぞれ、現実吟味の障害の程度と自我防衛の大きさを示すと、中央が山形になる曲線が描かれると考えている。ここで、原点 O は現実吟味の障害も自我防衛も全くなく、心理的に健康な人の理想型とされ、ここではすべてのエネルギーが建設的に用いられ、自我防衛に用いられることはないが、原点から山型の頂点に向かうにつれ、自我防衛の程度が少しずつ大きくなり、それに従って現実吟味の障害も少しずつ増加してゆく、しかし自我防衛に用いられるエネルギーが頂点に達すると、今度は自我防衛は減少し、現実吟味の障害がますます増加してゆくとされる。例えば、精神病者は、病識が乏しいことが多いが、現実吟味の障害が大きくなり過ぎて、自分の客観的な状態が把握できなくなっていると考えられるのである。

(2) 主観的な神経症性不安と人格の投影的評価

では、主観的な神経症性不安の高さと、自我の健全さの間には、何らかの対応関係が見いだせるのであろうか。先の Klopfer の考え方を参考に、神経症性不安の大きさと客観的人格評価を軸として、客観的人格評価が下がるにつれて、不安の総量が単調に増加すると仮定すれば、不安の総量と、主観的な不安の高さは図1のようになるのではないかと考えられる。ここで原点Oは、健常者の理想型であり、客観的な人格評価では全く問題がなく、主観的な不安もほとんど無い。客観的な人格評価が下がるに従って、主観的な不安は次第に増加すると同時に、身体化、行動化で処理される不安の割合も次第に増加し

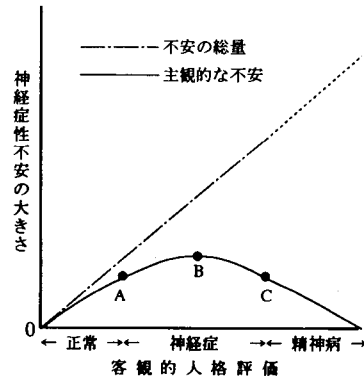


図1 神経症性不安の大きさと客観的人格評価
(Klopfer, 1956 を参考にした試図)

てくる。ここで、A～Cを神経症圏とすると、客観的人格評価にBを越える障害が出てくると、不安は主観的体験化よりも身体化されたり、行動化される割合の方がはるかに高くなり、不安の総量は増加しているにもかかわらず、意識化される不安はますます低下して行く。Bから精神病圏(Cより右)に近づくにつれ、不安の質が神経症圏と異なってくる可能性があるし、不安への対処の仕方も神経症とは異なり、身体化、行動化以外の戦略も入ってくる可能性があるが、主観的な不安の高さは正常者と同じ位にまで減少してゆく。B～Cには不安が主観的体験となりにくい心身症や行動化を繰り返すクライアントなどが入ることになる。

それでは、不安を主観的に体験する能力は、人格のどのような機能に関係が深いのであろうか。斎藤(1969)の、適応についての自己評定(質問紙)と投影法による客観的評価(ロールシャハ・テスト。以下ロ・テスト)の一致度についての研究が参考になるように思われる。斎藤(1969)は健常者を対象としたが、自己評価と客観的な評価は、健常者群でも、必ずしも一致しないことが示された。そして一致度が高い群には、ロ・テストの反応から、全般的に自我の健全度が高く、コントロール機能が確かであり、内向外向がともに発達した人が多く、中でも良質のM反応が多く見られる人に、一致度が高いことが報告されている。ロ・テストの中でM反応は、内省力、内的安定性、共感能力、想像力などを意味すると言われ、最も重視される決定因である。自己評定と客観的評価に関するこの結果は、不安の認知についても同じことがあてはまるのではないと思われる。すなわち、内省能力や内的安定感に優れた自我の総合的な健全度が高い人は、不安を意識化して処理することができるが、M反応の質・量が低下し、自我の健全度が低くなる度合いにしたがって、不安は認知されずに、身体化や行動化で処理される割合が高くなると考えられるのである。良質のM反応が多くあり、自我機能全般が健全で、不安を認知する能力のある人は、心理的健康度が高いため、不安の総量そのものが少ない筈である。つまり、正常者の中でも、相対的に自我が健康で、良質のM反応が一定以上ある人においては、神経症性不安の総量は少ないが、その不安はもっぱら意識化されるので、自我の健全さと意識的な不安は逆相関すると考えられる。しかし、M反応の質・量の低下を含む自我の健全さが低下するに従って、神経症性不安の総量も増加するが、その不安は、認知されずに負の不安として処理される比率が高く

なってくるので、認知される不安の高さは、ある段階から、自我の健全さとは関係が薄くなって行くことが推定される。

一方、内省能力や内的安定感の高い、自我機能全般が豊かな人は、主観的な神経症性不安が低くても不安を認知する能力を潜在的に充分にもっているものであり、現実不安に対しては、それを認知し、柔軟に対応して行く、自我の健全さをもっていると考えられる。このような人こそ、May (1950) が述べるような、正常な不安を認知し、それを乗り越えることができる人にあたるのであろう。

筆者の自我同一性地位面接 (Marcia, 1966) とロ・テストを組み合わせた研究 (森田, 1992) でも、探索を経て、同一性を達成した群や探索の最中にあるモラトリアム群は、探索をしていない早期完了群や同一性拡散群より、ロ・テストから見て自我が健康であるという結果を得た。また、同一性達成やモラトリアムでは、価値観や職業選択などを探索した際に、不安を認知した人の方が、認知しない人より、自我の健康度が高く、逆に、早期完了や同一性拡散群では、不安を認知した人の方が自我の健全さが低いという結果が見られた。不安を認知し同一性を達成した人や、不安を持ちこたえて同一性を探索し続けることのできる人は、不安を認知しない人や不安を持ちこたえられずに同一性拡散に陥ってしまう人に比べ、自我の健全さに優れているのである。また、面接の内容から、同一性達成とモラトリアムの不安は、同一性形成の探索と結び付いた現実不安であると思われることが多かったが、早期完了や同一性拡散群の不安は、探索に結び付くことが少なく、その多くは神経症的な悩みに近いように思われた。

ここで R-S 尺度や成長・抑制不安質問紙に今一度立ち戻ると、これらの質問紙での不安の高さは、主観的な自己報告によるものであるから、R-S 尺度については、内容的には神経症性不安の質問紙であるから、この得点が低い群の中には、潜在的な不安が高いのにもかかわらず、不安が抑圧され認知されない人と、真に心理的に健康度が高く、自我防衛そのものが極めて少ない人が混在している筈である。一方、R-S 尺度の得点が高い群にも、かなり自我の健全な人が混在している可能性も考えられる。本来の意味からすれば、Sr も Rr も不安に動かされやすい人達であり、R-S 次元の両極に近づくほど、自我の健全さも低くなるはずである。そうであれば、R-S 尺度の得点が低い人の一部は、Rr の本来の意味からすれば、除外されてしかるべきであろう。また、Rr, Sr のいずれの群においても、質問紙の得点と同じでも、投影法によって明らかにされる客観的な自我の健康度や内的な安定感が異なれば、被験者の質や、不安そのものの意味も違ってくる可能性が考えられる。

一方、成長不安質問紙についても、客観的な自我の健全さの程度により、成長不安の尺度で測られるものが、大きく違ってくる可能性が考えられ、この得点が高いことが、人格的な成長可能性に関連するとは簡単には言いがたいであろう。

お わ り に

以上に述べたように、主観的な不安の高さの持つ意味は、客観的な人格評価のレベルにより、そうとうに変わってくるものと考えられる。

不安と言っても、ここで取り上げた不安以外に、臨床心理学的な視点から、さまざまな質的に

異なった不安があるし、不安についての理論的着眼点も多数ある。また、ロールシャッハ・テストをはじめとした投影法の不安の指標もいろいろなものがあるが、それらが反映する不安の質的側面は、まだ実証的に充分明らかになっていないと言いがたい。斎藤（1991）は、不安の病理的なレベルや不安の発達的な内容を視野に入れ、そうした不安がロ・テストの反応内容からいかにして読み取れるかを、実際の反応を例示して考察している。不安を真に理解しようとするれば、単に数量的理解に止まらず、不安の理論を背景にした質的な面も考慮されねばならないであろう。不安研究の方法論的な問題を踏まえて、理論と実証研究を統合してゆけるように、さらに一步踏み込んだ研究がなされることが望まれる。

文 献

- Alpert, R., & Norman, R. H. (1960) Anxiety in academic achievement situations. *Journal of Abnormal and Social psychology*, 61, 207-215.
- Altrocchi, J., Parsons, O. A., & Dickoff, Hilda. (1960) Changes in self-ideal discrepancy in repressors and sensitizers. *Journal of Abnormal and Social psychology*, 61, 67-72.
- Bell, P. A., & Byrne, D. (1978) Repression-Sensitization. In H. London, & J. E. Exner, Jr. (Eds), *Dimensions of Personality*. New York: Wiley. Chap. II.
- Bruner, J. S., & Postman, L. (1947) Emotional selectivity in perception and reaction. *Journal of Personality*, 16, 69-77.
- Byrne, D. (1961) The repression-sensitization scale: Rationale, reliability, and validity. *Journal of Personality*, 29, 334-349.
- Byrne, D. (1961) Anxiety and the experimental arousal of affiliation need. *Journal of Abnormal and Social psychology*, 63, 660-662.
- Carpenter, B., Wiener, M., & Carpenter, J. T. (1956) Predictability of perceptual defense behavior. *Journal of Abnormal and Social psychology*, 52, 380-383.
- Cattell, R. B. (1966), Anxiety and motivation: Theory and crucial experiments. In Spielberger, C. D. (Ed.) *Anxiety and behaviour*. New York: Academic Press, Pp. 23-62.
- Cattell, R. B. & Scheier, I. H. (1961) the meaning and measurement of neuroticism and anxiety. New York: Ronald Press.
- Eriksen, C. W. (1952) Defense against ego-threat in memory and perception. *Journal of Abnormal and Social psychology*, 47, 230-235.
- Freud, A. (1936) *Das Ich und Abwehrmechanismen*. Internationaler Psychoanalytischer Verlag. (フロイド A., 外林大作 (訳), 1958, 自我と防衛機制, 誠信書房)
- Freud, S. (1894) *Die Abwehr-Neuropsychosen*. *Gesammelte Werke*, 57-74. (防衛—神経精神病, 井村恒郎 (訳), フロイド著作集 6, 人文書院, 7-17.)
- Freud, S. (1917) *Vorlesungen zur Einführung in Psychoanalyse*. Vienna. (フロイド S. 井村恒郎, 馬場謙一 (訳), 1970, 精神分析入門, 日本教文社)
- Freud, S. (1926) *Hemmung, Symptom und Angst*. Leipzig, Wien: Internationale Psychoanalytischer Verlag. (フロイド S., 加藤正明 (訳), 1969, 制止・症状・不安, フロイド選集改訂版 10 (不安の問題), 日本教文社)
- Freud, S. (1985) *Über die Berechtigung, von der Neurasthenie einen bestimmten Symptomenkomplex als "Angstneurose" abzutrennen*. *Neurologische Zentralblatt*, Nr. 2. (フロイド S., 加藤正明 (訳), 1969, 「不安神経症」という特定症状群を神経衰弱から分離する理由について, フロイド選集改訂版 10 (不安の問題), 日本教文社)
- Golin, S., Herron, E. W., Lakota, R., & Reineck, L. (1967) Factor analytic study of the manifest

- anxiety, extraversion and repression-sensitization scales. *Journal of Consulting Psychology*. 31, 564-569.
- 笠原嘉 (1983) 不安・憂鬱・無気力——正常と異常の境目——. 岩波講座 精神の科学 3 精神の危機, 207-260, 岩波書店.
- Kierkegaard, S. (1884) *Der Begriff der Angst*. Übersetzt von Chr. Sechrempf, 1923. (ケルケゴール S., 斎藤信治 (訳), 1979, 不安の概念, 岩波新書.)
- 木村法子 (1983) TAT による Repression-Sensitization 次元の研究. *心理学研究* 54 (2), 95-101.
- Klopfer, B. et al. (1956) *Development Rorschach Technique*. vol. 2. New York, Hercourt Brace & World Book.
- 古賀愛人 (1980) 状態不安と特性不安の問題, *心理学評論* vol. 23, No3, 211-237.
- Lazarus, R. S., Eriksen, C. W., & Fonda, C. P. (1951) Personality dynamics and auditory perceptual recognition. *Journal of Personality*, 19, 471-482.
- Lazarus, R. S., & Longo, N. (1953) The consistency of psychological defense against threat. *Journal of Abnormal and Social psychology*, 48, 495-499.
- Marcia, J. E. (1966) Development and Validation of Ego Identity Status. *J. of Personality & social Psychology* Vol. 3, No. 5, 551-558.
- Maslow, A. H. (1962), *Toward a psychology of being*. New York: D. Van Nostrand Co. Inc. (マスロー, 上田吉一 (訳), 1964, 完全なる人間. 誠信書房)
- 森田慎 (1992) 面接法, ロールシャッハ・テスト, CAS による自我同一性地位の研究, 京都大学教育学部教育心理学科卒業論文
- 森田慎 (1994) 不安の認知と投影課題への対処～質問紙と操作的 TAT を用いて～, 京都大学教育学研究課修士論文.
- Phares, E. J. (1961) TAT performance as a function of anxiety and coping-avoiding behavior. *Journal of Consulting Psychology*, 25, 257-259.
- Postman, L., Bruner, J. S., & McGinnies, E. (1948) Personal values as selective factors in perception. *Journal of Abnormal and Social psychology*, 43, 142-154.
- May, R. (1950), *The meaning of anxiety*. New York: The Ronald Press Company. (ロロ・メイ, 小野泰博 (訳), 不安の人間学, 1963, 誠信書房)
- 斎藤久美子 (1962) ロールシャッハ・テストと一質問紙法 (自己評価法) による適応の研究, ロールシャッハ研究 V, 56-65.
- 斎藤久美子 (1969) ロールシャッハ反応と自己評定の対応性について, ロールシャッハ研究 IX, 121-138.
- 斎藤久美子 (1991) 不安の心理臨床—ロールシャッハ法による不安理解, *こころの科学* 40, 66-71.
- Spielberger, C. D. (1975) Anxiety: State-trait process. In Spielberger, C. D. (E. d.) *Stress and Anxiety*, Vol. 1, New York: John Wiley & Sons, 115-143.
- Spielberger, C. D., Gorsuch, R. L., & Lushene, R. E. (1970) *Manual for the state-trait anxiety inventory*. Palo Alto, Calif.: Consulting Psychologists Press.
- Sullivan, H. S. (1953) *Inter personal Theory of Psychiatry*. Norton, New York. (中井久夫他 (訳), 1990, 精神医学は対人関係論である, みすず書房)
- Ullmann, L. P. (1958) Clinical correlates of facilitation and inhibition of response to emotional stimuli. *Journal of Projective Technique*, 22, 341-347.
- 山本誠一 (1992) 青年期における不安の二側面に関する実証的検討. *心理学研究* 63 (1), 8-15.